

論文

介護福祉学生が作成した絵本の効果 —高校生への介護のイメージの変化から—

根本秀美 (信州短期大学)

Effects of picture books created by care work students —Changes in images of caregiving in senior high school students—

Hidemi Nemoto (Shinshu Junior College)

Abstract: The purpose of the study was to clarify the effects of picture books created by care work students on the images of caregiving in senior high school students. The picture books were created based on the care work students' experience of care practice, with an aim to assist the high school students to understand caregiving.

The subjects were 118 senior high school students. The changes in images of caregiving after the picture book experience were analyzed employing a semantic differential method.

The results showed that the picture books were effective in improving the images of caregiving, thereby generating an interest in caregiving. The images associated with caregiving consisted of negative (i.e. 'demanding') and positive (i.e. 'compassionate and kind' and 'challenging and rewarding') ones.

In response to the aging society where everyone would be involved in caregiving in the future, an early exposure to the preparatory education of caregiving at junior and senior high school levels is necessary. Picture book experience may serve as one of such educational methods.

Keywords: images of caregiving, picture books, senior high school students, care work students, Semantic Differential Method

I. はじめに

高齢化社会に入り、認知症や介護が必要となる方が増えている。新聞やテレビやマスコミ等からは介護に対する情報や体験談や専門家からの情報もあふれている。介護の仕事は3K「きつい・汚い・危険」¹⁾ 他給料が安いなどともいわれ介護職の定着率も低く、それほどに魅力ある仕事とは思われていない。また介護に対する社会的なイメージが悪い中、介護福祉士養成施設における学生の定員割れは深刻な課題となっている²⁾。青柳の高校生に対する意識調査では、約95%の生徒は介護の仕事は重要であるが、85%の生徒は仕事につきたくないと報告している³⁾。このような状況では将来においても益々の介護のマンパワー不足が懸念される。いずれ介護の担い手になるであろう中学生、高校生に若いうちから介護について少しでも理解してもらう必要があると考えた。本校の介護福祉士を目指す3期生も同じような思いがあり、自分達の出来ることはないかと皆で話し合った。その結果、自分達の現在の思いや、介護にすすむきっかけ、実習で

の実体験を、中学生や高校生に伝えることが、現在自分達にできることではないかと意見がまとまり、その手段を絵本として作成することにした。

絵本は読む側にとっては短い文章と絵で内容が分かりやすく、短時間で読める。小さい頃から親しんでいるものなので身近なものとしてとらえやすい。また作る側においては、大きな機材は必要なく経費も少なく、授業や実習の合間にも作業しやすいので絵本という形にした。そこで作成した絵本を高校生に読んでもらい効果を検討する。

2. 研究目的

本研究の目的は、高校生に作成した絵本をよんでもらい読む前と後にアンケートをとり介護のイメージの変化を分析し絵本の効果を考察する。

3. 絵本作成について

中高校生を対象に介護について知ってもらうために、

自らの体験を基に絵本を2冊作った。平成21年5月上旬から作業にとりかかり10月初旬に完成し、10月下旬の学園祭で展示した。作成メンバーは2年生9名で男1名女8名である。1冊目は学生の経験から介護福祉士を目指したきっかけ、本の題名は「介護福祉士を目指すモモちゃん」14ページ、2冊目は介護福祉実習での体験で題名は「とめさんからのおくりもの」25ページである。内容は認知症のとめさんと学生のかかわりとその後を描いたものである。絵本作成用の市販のもので装丁は大きさ23cm×23cm、地色は白で文字は手書きで、絵は色鉛筆で描いた。調査の際には対象の高校生全員に手渡し読んでもらうためA4の大きさをカラー印刷した。高校生に短大の実習の様子や認知症のことを知ってもらいたいと考え今回は「とめさんからのおくりもの」を使用した。絵本の概要は本稿の後部に掲載した。

4. 研究方法

1) 対象者

A高校はN県の公立の普通高校で福祉コース、社会教養コース、進学コースがある。福祉コースは将来福祉や保育を目指す生徒が対象で、社会教養コースは地域社会に貢献しようとしている生徒が対象で、進学コースは進学を目指す生徒を対象としている。

1年生と2年生は福祉コースの生徒で3年生は各コースの生徒が混在している。

2) 調査時期 2010年9月6日～9月17日

3) 調査内容

絵本読前アンケートは基本情報、学年、性別、コース、介護の経験介護のイメージの形容詞対24項目である。絵本読後アンケートは、読後の感想で1番と2番の思ったこと、印象場面の有無、ストーリーの評価(5段階)、絵の出来栄の評価(5段階)、介護のイメージの形容詞対24項目、介護についての興味関心の増減について(5段階)である。

形容詞対については介護に対するイメージを知るためにオスグッドらの考案したSD法(semantic differential法)を用いた。SD法とはさまざまな概念(対象)の感情的差異を形容詞対による評定によって調べる方法である⁴⁾。評定形容詞対の作成について、岡本は安定性の確認された9項目を勧めておりまずそれを採用した。それは良い—悪い、好きな—嫌いな、美しい—汚い、静かな—騒がしい、動的な—静的な、派手な—地味な、軽い—重い、明るい—暗い、陽気な—陰気である⁵⁾、次に介護

のイメージと一般に考えられるものきつい「楽—辛い」、汚い「美しい—汚いこれは岡本の提唱しているものと重なる」、危険「安全な—危険な」を加えた。次に介護の基本で重要なもの尊厳「尊い—卑しい」、自立「自立した—依存した」、幸福「幸せな—不幸な」の5項目と他10項目を追加し合計24項目とした。評定の方法は5段階尺度とし好印象から悪印象へ順序づけ、A-B表示についてAについて5、Bについて1を与える間隔尺度とした。

4) 調査の実際

- (1) 高校の先生がアンケート前を授業あるはホームルームで生徒に配布し記入してもらう。(10分)
- (2) 絵本を全生徒に手渡す。
- (3) 先生が絵本を読み、生徒も絵本を同時にみる。
- (4) その後生徒本人が読む。(10分)
- (5) アンケート後を配布し生徒に記入してもらう(10分)。

5) 調査結果の分析

(1) 単純集計

- ①各属性カテゴリー別集計、学年、コース、性別、介護経験読後の評価と感想、興味関心の変化
- ②各形容詞対前後の平均、SD(標準偏差)

(2) 統計的検定

興味関心については χ^2 検定、形容詞対は前後のt検定

(3) 重回帰分析

介護福祉学生が作った絵本を高校生が読んで、介護に対する各イメージが改善され、それが転じて介護に関する関心をもたらす因果性を明確化する。

5. 倫理的配慮

高校の先生から対象生徒に趣旨と、1) 秘密を守ること、2) 拒否できること、3) 学校の成績等には一切関係ないこと、4) 発表の際は個人が特定できないようにすること、を口頭で説明し承諾を得た。

6. 結果と考察

対象生徒は118名、1年生21名、2年生18名、3年生79名である。福祉コース54名、社会教養コース23名、進学コース41名である。男子63名、女子55名で、各コースの男子女子は福祉コース22名、32名、社会教養コースは18名、5名、進学コースは23名、18名である

表 1 対象生徒

	コース			合計
	福祉	社会教養	進学	
1 年生	21	0	0	21
2 年生	18	0	0	18
3 年生	15	23	41	79
計	54	23	41	118

表 2 対象生徒性別

	コース			合計
	福祉	社会教養	進学	
男子	22	18	23	63
女子	32	5	18	55
計	54	23	41	118

表 3 介護経験

介護経験	コース			合計
	福祉	社会教養	進学	
あり	33	4	11	48
なし	21	19	30	70
計	54	23	41	118

表 4 ストーリーと絵の出来栄え

評価	ストーリー		絵の出来栄え	
	f	%	f	%
良い	90	76.3	81	69.2
まあまあ良い	23	19.5	28	23.9
どちらともいえない	5	4.2	5	4.3
あまり良くない	0	0	3	2.6
悪い	0	0	0	0
計	118	100	117	100

(表 1) (表 2)。

介護の経験がある生徒は 48 名である。福祉コースは授業の一環として行なっていることもあり多い (表 3)。

1) 絵本のストーリーと絵の出来栄え (表 4)

絵本のストーリーについては、よい 90 名 (76.3%)、まあまあよい 23 名 (19.5%)、どちらともいえない 5 名 (4.2%)、あまり良くないと悪いは 0 であった。絵の出来栄えについては、良い 81 名 (69.2%)、まあまあ良い 28 名 (23.9%)、どちらともいえない 5 名 (4.3%)、あまり良くないは 3 名 (2.6%)、悪いは 0 であった。よいとまあまあ良いを入れるとストーリーは約 95%、絵は約 93% の生徒は、作成した絵本を好印象に思っている。

2) 絵本の読後の感想 (表 5)

絵本読後に一番に思ったことについては、主人公の気持ちが伝わってきたが 48 名 (41.3%)、実習の様子が分

表 5 絵本の読後の感想

感想	一番に思ったこと		二番に思ったこと	
	f	%	f	%
主人公の気持ちが伝わってきた	48	41.3	35	30.4
実習の様子が分かった	43	37.1	30	26.1
介護を理解する助けとなった	17	14.7	31	27
認知症のことが分かった	6	5.2	14	12.2
とくに無し	2	1.7	4	3.5
その他	0	0	1	0.8
計	116	100	115	100

表 6 絵本読後介護に対する興味関心

興味関心	f	%
増した	37	31.7
少し増した	59	50.4
どちらともいえない	17	14.5
少し減った	0	0
ない	4	3.4
計	117	100

かったが 43 名 (37.1%)、介護を理解する助けとなったが 17 名 (14.7%)、認知症のことが分かったが 6 名 (5.2%)、とくに無しが 2 名 (1.7%) であった。二番に思ったことは、主人公の気持ちが伝わってきたが 35 名 (30.4%)、実習の様子が分かったが 30 名 (26.1%)、介護を理解する助けとなった 31 名 (27.0%)、認知症のことが分かったが 14 名 (12.2%)、とくに無しが 4 名 (3.5%) であった。読後の一番と二番の感想として、約 71% の生徒に主人公の思いが伝わり、約 63% が介護実習の様子が分かり、介護を理解する助けとなったが約 41% である。そして認知症のことが分かった約 17% ということは、生徒たちは絵本の内容から得るものがあり、個々の生徒の認識の程度は測ることは難しいが、絵本の効果はあった。

3) 介護に対する興味関心 (表 6)

絵本を読んだ後の介護に対しての興味関心の結果は、増したが 31.7%、少し増したが 50.4% である。両方加えると 82% が絵本により影響をうけている。

評価 5 段階の平均は 4.07 で SD = 0.88 である、「どちらでもない」の 3 を検定値とし 1 サンプルの t 検定を行なった。t = 13.16 (p < .001) で統計的に有意であり、作成した絵本を読んだことで介護に対する興味関心が高まることが分かった。

4) 介護に対する興味関心と各カテゴリーとの関連 (表 7)

絵本読後の介護に対する興味関心とコース、学年、性

表7 絵本読後の興味関心との関連

カテゴリー	f	%	読後興味関心		χ^2	
			ない	増した		
1年	21	17.8	2	19	4.28	
2年	18	15.3	1	17		
3年	66	66.9	18	60		
福祉	54	45.8	5	49	7.89	*
社会教養	23	19.5	8	14		
進学	41	34.7	8	33	0.82	
男	63	53.4	13	49		
女	55	46.6	8	47		
あり	48	40.7	4	44	5.11	*
なし	70	59.3	7	52		
あり	87	75.0	9	77	11.39	**
なし	29	25.0	11	18		

*p < .05 **p < .01

表8 介護経験と印象場面

介護経験	印象場面		計
	あり	なし	
あり	42	5	47
なし	45	24	69
	87	29	116

$\chi^2 = 8.69$ p < .01

表9 介護経験の内容

項目	回数 (複数可)	
	f	%
高校の授業の一環	29	60.0
ボランティア	12	25.0
祖父母	9	19.8
小中学校 介護体験	9	19.8

表10 自由記載

形容詞対	絵本読前		絵本読後		t	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
1 良い—悪い	4.14	0.94	4.50	0.73	4.73	***
2 好き—嫌い	3.37	1.02	3.72	0.91	5.85	**
3 美しい—汚い	3.26	0.84	3.83	0.96	7.04	**
4 軽い—重い	2.37	0.94	2.42	1.03	0.43	
5 静かな—騒がしい	3.19	1.05	3.11	0.96	0.74	
6 陽気な—陰気な	3.17	0.87	3.41	0.71	2.78	**
7 派手な—地味な	2.32	1.01	2.59	0.88	4.05	***
8 動的な—静的な	3.55	1.12	3.66	0.96	1.24	
9 明るい—暗い	3.69	1.05	3.99	1.00	3.32	**
10 優しい—冷たい	4.39	0.87	4.52	0.83	1.72	
11 楽な—辛い	2.01	1.01	2.21	0.96	2.55	*
12 安全な—危険な	3.23	1.00	3.25	0.98	0.37	
13 カッコいい—カッコ悪い	3.27	0.95	3.86	0.94	6.32	***
14 誇りある—誇りない	4.14	0.90	4.53	0.69	5.90	***
15 やりがいがある—やりがいがない	4.34	0.90	4.59	0.67	3.62	***
16 豊かな—貧しい	3.52	0.92	3.88	0.94	5.04	***
17 思いやりのある—思いやりのない	4.63	0.70	4.77	0.44	2.83	**
18 心地よい—不快な	3.57	1.05	4.00	0.97	5.24	***
19 尊重する—軽蔑する	4.15	0.96	4.32	0.87	2.44	*
20 自立した—依存した	3.66	0.93	3.69	0.95	0.53	
21 安心した—不安な	3.73	1.06	3.85	0.94	1.52	
22 尊い—卑しい	3.83	0.89	4.08	0.91	3.78	***
23 幸せな—不幸な	3.72	0.94	4.07	0.90	4.39	***
24 希望ある—失望的な	3.78	1.01	4.07	1.02	3.66	***

*p < .05 **p < .01 ***p < .001

別、介護経験、印象場面の関連を調べるために χ^2 検定を行なった。興味関心が増した、少し増したを「増した」群とし、どちらでもない興味関心がないを「ない」群とした。その結果介護に関する興味関心はコース、介護経験、に関連し(p<.05)、印象場面があるかないは大きく関連していた(p<.01)。福祉コースは将来介護福祉士を目指す学生もいて関心は高いであろうと思われる。また性別については、介護の関心は女子の方が男子より高い⁴⁾と報告があるが、本調査は絵本を読んだ後の変化であるため同様の結果は得られなかった。

印象場面や感動場面が多くあれば、その内容に影響され、興味や関心が増すのは当然である。

印象場面の有無は、各生徒の感性や経験によって異なるのではないかと考え、介護経験との関連を調べるために χ^2 検定を行なった。その結果は $\chi^2 = 8.69$ (p<.01)で、介護経験があることは印象場面があることに関連していること分かった(表8)。

介護経験の内容は実際に経験がある48人中、高校の授業の一環は29人、次いでボランティアで12人である。回数は10回が最大で平均3.1回であった。高校の授業

での経験は、記憶が新しいこと、絵本の内容と重なる部分もあった可能性もあり、介護経験があればより身近な思いとして印象が強く感じとられたのではないかと思われる(表9)。

7) 形容詞対による介護のイメージ(表10)

24の形容詞対でアンケート前の平均の最大から順にみると、思いやりのある—思いやりのないが4.63(SD=0.70)、優しい—冷たい4.39(SD=0.87)、やりがいがある—やりがいがない4.34(SD=0.90)で、絵本読後のアンケート後は思いやりのある—思いやりのないが4.77(SD=0.44)、やりがいがある—やりがいがない4.59(SD=0.67)誇りある—誇りない4.53(SD=0.69)の順である。また最小は前が楽な—辛い2.01(SD=1.01)、派手な—地味な2.32(SD=1.01)、軽い—重い2.37(SD=0.94)、で、後の最小は楽な—辛い2.21(SD=0.96)、軽い—重い2.42(SD=1.03)、派手な—地味な2.59(SD=0.88)である。

また標準偏差をみると、アンケート前の最大は動的な—静的な1.12、次に安心した—不安な1.06、であり、後は軽い—重いでは1.03、次に希望ある—希望ない1.02である。

静かな—騒がしいは前3.19(SD=1.05)で後は3.11(SD=0.96)で微差であるが、静かな—騒がしいを除いて、他は全て読後の平均が上がっていて好印象化した。

また標準偏差は、アンケート前は1以上のものが10あるのに対し後は3でその幅も小さくなっている。以上から生徒皆の意見が統一され収束化している傾向がみられる。

個々の形容詞対をみると、アンケート前のマイナスイメージは辛い地味で重いイメージがある。一般的に言われている、きついあるいは辛いイメージはあるが、汚い、危険はマイナス傾向にはそれほど際立ってはいない。アンケート後において24形容詞対の中で辛い最低の得点であり辛く重く地味なイメージであるが汚い、危険はそれほど際立っていない。一方プラスのイメージとしてアンケート前は思いやりや優しさがあり、やりがいがあると認識されている。後も思いやり、やりがい、優しさがあり、誇りあると同様であった。人間として関わる時に必要なものとしての思いやりや優しさがあり、また職業としてやりがいや誇りがあるというイメージがあることが分かった。以上からプラスイメージとマイナスイメージの両方が混在していることが分かった。

各形容詞対の前後に差があるかどうかをt検定を行な

った。その結果、良い—悪い $t=4.73$ ・派手な—地味な $t=4.05$ ・かっこいい—かっこ悪い $t=6.32$ ・誇りある—誇りない $t=5.90$ ・やりがいがある—やりがいがない $t=3.62$ ・豊かな—貧しい $t=5.04$ ・心地よい—不快な $t=5.24$ ・尊い—卑しい $t=3.78$ ・幸せな—不幸な $t=4.39$ ・希望的ある—失望的な $t=3.66$ ($p<.001$)、好き—嫌い $t=5.85$ ・美しい—汚い $t=7.04$ ・陽気な—陰気な $t=2.78$ ・明るい—暗い $t=3.32$ ・思いやりのある—思いやりのない $t=2.83$ ($p<.01$)、楽な—辛い $t=2.55$ ・尊重する—軽蔑する $t=2.44$ ($p<.05$)の17が統計的に有意であり、前後で変化があった。以上から絵本を読む前と読んだ後には明らかに変化があり、イメージが好印象に傾いていることから、作成した絵本は介護のイメージの変化に効果をもたらすことが分かった。

次に介護の基本で重要と考えたもの尊厳(尊い—卑しい)、自立(自立した—依存した)については、絵本の内容からは理解できにくいものであり、これらは、専門的な教育の中で教える内容である。

8) 重回帰分析

興味関心が増した程度と、各形容詞対の前後差の相関の最大と第2最大は、「美しい—汚い」「静か—騒がしい」であった。その結果「美しい—汚い」が最も有力な興味関心の変化の原因であり、次に「静か—騒がしい」がそれに次ぐ(ただしこの場合は10%で有意である)。よってこの2つの前後差により、興味関心の程度が予測される。yを興味関心、 x_1 を「美しい—汚い」の前後差、 x_2 を「静か—騒がしい」の前後差とすると、

$$y = -0.160x_1 - 0.115x_2 + 3.975 \quad R^2 = 0.052$$

となる。

今後絵本を作る場合、介護を好印象とするためには、美しく静かなイメージの内容や絵に心がけることがよい。

9) 自由記載(表11)

介護についての思いや考えを絵本を読む前に、絵本を読んだ後は絵本の感想や介護についての思いや考えを自由に記載してもらった。その結果79名の記載があった。その中で読む前と後の両方に記載のあるものが66名であった。その内容は絵本から影響をうけイメージの変化や好印象に変化したもの、学びになっているものが多く記載されていた。そのうち顕著と考えられる10名を取り上げ表示した。

表 11 形容詞対による介護のイメージ

	絵本読前	絵本読後
1	とても大変そうなイメージがある。	介護をすることで、その人のこころの支えになれるということが分かった。
2	この先も必要なものだと思います。現実を見て、自分は直面してはいない。けれど、いずれは訪れる問題で継続していく必要があると思います。	私たちは、まず上辺だけを見て深い考えを除きます。人を思いやる、人を思う、人を愛するには真っすぐ相手と接していくことが大切だと思いました。
3	自分は人と接することが好き。	よくこのような本を作ったと感心しました。これからしっかりと介護の勉強をしていこうと思った。大学に行けたらしっかりと社会福祉の勉強をしようと思う。
4	これから高齢化がどんどん進んでいくから、どんどん若い人達がやっていくべきだと思う。	認知症の人は最近のことは忘れてしまうが、昔のことは覚えているんだなと思った。
5	福祉の仕事は、給料が安く、大変な仕事というイメージがある。	絵本だったので、内容も分かりやすかった。介護は辛いこともあり、大変な仕事だとは思いますが、やりがいのある仕事だと思う。この本は、自分が実習に行くとき生かせると思う。
6	介護をすることはとても大変なことだけど、私はとてもやりがいがあることだと考えている。	やっぱり絵本の中でもあったように出会いがあれば、いつ別れもくるというのはとても辛いことだと思ったけど、本を読んでもますます自分も介護などに携わる仕事をしたと思った。
7	自分の思い通りにならないこともあり、とても大変な仕事だと思う。	お年寄りを介護する大変さは変わらないけど、そのお年寄りの為に一つでも何かを考えてあげることは大変だけど、喜んでもらった時の満足度はとても大きいと思った。
8	責任がある。	由里香さんのどうにかして仲良くなろうという思いが伝わってきた。とめさんとの絆が改めて読んでいる側に伝わって感動した。この本を見て、自分も少し変わってきたかなと思う。
9	とても大変な職業だと思うので、もっと就職する人が増えないと職員さん一人一人の負担が大きくなって更に大変だと思う。もっと介護の人口が増えてほしい。	この本みたいに、全部うまくいくわけないだろうけど、主人公みたいに頑張っていきたいと思った。絵本の内容では、物語の中にしっかりと認知症がどんなものかを織り交ぜてとても良かった。
10	年配の方で車椅子を使用したり、自分でトイレに行けなかったり、食事ができないときに介護しているのを見ると大変だと思う。	「大変」という印象だが、お年寄りへの気持ちを理解して、その為にどうしたらいいのか悩んで行動に移すことが「思いやりがあってカッコイイ」という印象が変わった。

〈絵本の概要〉

とめさんからのおくりもの

主人公 由里香（ゆりか）は介護福祉士を目指す短期大学2年生です。実習当日におばあさんと目があい、にこっと笑いかけた。しかしおばあさんはムスツとしたままだった。そのおばあさんの名はとめさんといって認知症のある方だった。由里香はとめさんが気になっていたの、お話をした。生い立ちや昔のこと、好きなことなど聞いた。

何日かたち、とめさんの様子を見てみると、夕方になり不思議な行動をとることに気がついた。施設を歩き回ったり、家に帰りたいと訴えたり、時には怒鳴ったり、つねったりした。

なぜそのような行動をするのか、施設職員にきいたところ、入所まもないので周りになれていなく、不安があるのではないかとのことだった。

由里香は、とめさんが、何か楽しめることはないかと考え、花を育てるのが好きだから、一緒にお花を植えた。その他にも一緒に散歩したり昔の歌をうたったりしお話をした。とめさんには息子がいたことを話してくれた。小さい頃交通事故で死んでしまった。供養に行きたいと涙を流していた。由里香は認知症の方は昔の辛いこと、楽しいことは覚えているんだなと、感じた。とめさんは少しづつ落ち着きを取り戻していった。そして実習は終わった。

数ヶ月後、由里香は施設へ就職しとめさんと再会した。しかしとめさんは、認知症のため由里香を覚えていなかった。

ある日、とめさんは急にひどい熱を出し寝込んでしまった。

少し良くなったけれど、雨の日に花の世話をするために、勝手に外に出てしまった。そのため風邪が悪化して、肺炎になり寝たきりになってしまった。

由里香は一生懸命とめさんを介護した。とめさんは由里香に「ほんとうにありがとねえ。幸せだったよ。」と感謝の言葉を言った。由里香の介護の甲斐もなく、とめさんは亡くなった。由里香は実習で辛かった時、とめさんが優しくしてくれたときのことや、とめさんが歩き回る理由は、本当は深い理由があったという事を思い出し、人の上辺だけでなく、中身を見ることも大切だということに気付いた。

そしてこれからも介護を続けていこうと決意した。

7. 全体考察

介護福祉学生が、授業や実習で忙しい中、介護を後輩

たちに理解してもらうために、絵本を作った。それを高校生に読んでもらいその有効性を調べた。それは、読後の興味関心の変化と形容詞対のイメージの変化で分析した。

その結果、介護に対する各形容詞のイメージが改善され、それが転じて介護に関する関心をもたらすことが分かり、作成した絵本は効果があり有効である。

作成した絵本が対象の高校生に介護に関心をもたらし、好評価を得られた要因としては、ストーリーや絵が良かった点と 75% の生徒が印象場面があったことである。また他の要因として、ストーリーが介護福祉学生の実習での実体験であり、学生の感性で作ったものであること、純粋で素直な気持ちが表出された点にあると考えられる。

介護のイメージは、1) 「辛い」というマイナスイメージと、2) 「思いやりや優しい」、3) 「やりがいや誇りある」というプラスのイメージの 3 つがあるとこがわかった。3K 「きつい・汚い・危険」イメージの危険、汚いについては際立っておらず読前も読後の変化も少なく、介護のイメージとは本研究からはいえない。

大川、川田は高校生が絵本を読むことを勧めている^{7)、8)}。本を読むことは、直接は体験しないが、話に入りこむことで疑似体験ができる。そしてその登場人物の内面に触れることができる。絵本は絵があることでより理解しやすくイメージをつくりやすい、またその感動や印象深い思いが、その対象をより好印象に招き内面を豊かにし成長させる⁹⁾。自由記載の内容からも、介護の理解とイメージの変化の記載もあり、人を見るとき上辺だけではいけないなど、内面をみることの大切さや、絵本を読んで自分も少し変わったなど内面的変化も垣間見られた。

介護の概念を絵本という視覚的な手段として読んでもらうことは、介護の啓蒙の一翼を担うことになり社会的意義を高め、貢献する側面があることも示唆された。

高齢化が進むわが国にとって、いずれ親や肉親を介護するあるいは、される立場になり、だれもが介護に関わる時代になる。またその期間も長くなると想定され、一人ひとりが高齢期を幸せに過ごすための準備として、中学生高校生のうちから介護を当たりまえとして学ぶ、介護準備教育が必要である。介護を学び理解する為には、絵本もその 1 つの手段といえる。

8. おわりに

今後この研究は因子分析を用いて発展できると構想しているが、それについては、今後の課題とする。

謝 辞

この研究にご協力くださった、丸野久美子先生に深く感謝いたします。

[投稿 22 年 12 月 17 日、受理 23 年 1 月 31 日]

【引用文献】

- 1) 峯尾武巳 介護のイメージアップの方法・ゼミ活動「ハートケアプロジェクト」をとおしてふれあいケア 15(11) 12-18 2009-11
- 2) 津田理恵子 学生の介護職のイメージ—介護福祉実習体験の違いによる意識の比較 厚生指針 57(8) 27-32 2010-08
- 3) 青柳育子 高校生の介護意識の実態—高等学校 3 校のアンケートの調査から—日本生涯教育学会 29 163-170 2008
- 4) 岡本康弘 計量心理学 培風館 125-156 2006
- 5) 岡本康弘 前掲載
- 6) 青柳育子 前掲載
- 7) 大川美津子 もうすぐ独り立ちする人たちへ—高校生にも絵本を—家庭科教育 76(5) 13-17 2002-5
- 8) 川田静江 心をはぐくむ絵本を高校生に 学校図書館 652 67-69 2005-2
- 9) 大川美津子 前掲載

【参考文献】

- 青柳育子 高校生親子の介護意識と介護実習に関する検討—A 大学の親と昨年調査の高校生の意識から—日本生涯教育学会 30 111-117 2009
- 大前衛 高校生の福祉や家族介護に対する意識に関する調査研究(その 1) 湊川女子短期大学紀要(33) 36-41 1999
- 加藤聖子 福祉教育法の現状と課題 人間生活学研究 17 27-33 2010-3
- 加藤聖子 高校生の福祉意識 藤女子大学 QOL 研究所紀要 2(1) 55-63 2007-3
- 中川幸子 本学学生の精神看護学実習前後の精神障害者イメージの変化に関する一考察 日本赤十字看護大学紀要 5 29-36